

知能は言葉によってつくられる

まずは、こんな興味深いデータからご紹介しましょう。

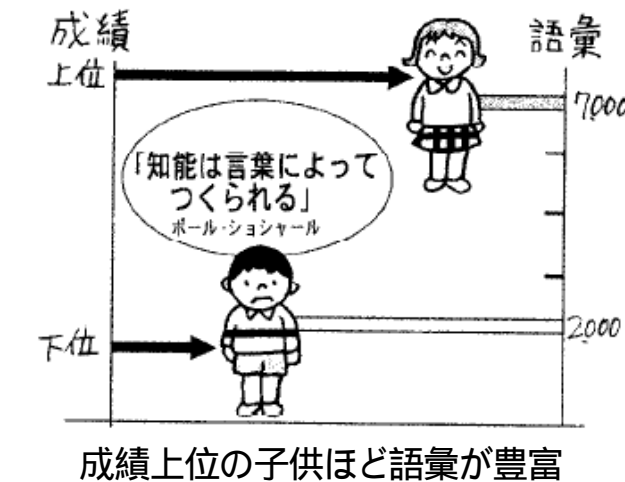
小学生を対象に、知っている言葉の数(=語彙)と成績の関係を調べたところ、一年生の段階で、成績上位の子どもの語彙が約7000語だったのに対し、成績下位の子どもは約2000語と、何と三倍以上もの差があることがわかったのです。そして、六年生でも、全体に語彙は増えているものの、成績上位者と下位者とでは、やはり語彙に三倍以上の格差があったといえます。

つまり、この結果は「知っている言葉が多い子どもほど成績もよい」という傾向をはっきりと表しているわけです。

しかし、よくよく考えてみますと、これは少しも意外なことではありません。私たち人間は、言葉があってこそ、はじめて考えることができます。そして、理解したり表現しようとしたりする内容が、高度に、また複雑になればなるほど、

その内容に見合った豊かな語彙が必要になってきます。

逆に言えば、知っている言葉が多ければ多いほど、一つの事柄をより深く理解したり、より豊かに表現したりすることが可能になるのです。



早い話、算数や社会、理科といった国語以外の科目でも、まず先

生の話や教科書に書かれていることをしっかり理解する能力がなければ、いくら机に向かっていても、学習効果は上がりませんし、子どもの苦手な算数の文章問題は、数式を知っていても問題の内容を読み取る力がなければ解けないのです。

そうした意味で、言葉の力というのは、あらゆる教科の基礎であり、子どもの考える力、すなわち知能そのものに直結していると言ってもよいでしょう。

また、ふだん、あまり意識することはありませんが、そうした知能の土台となる人間の記憶自体も、見聞きしたことがそのまま残るのではなく、一度頭の中で言葉に置き換えることで、はじめて知識として蓄積されていくものです。

実際に、何人かの子どもに、黄色い縞模様のある蝶の標本を見せ、よく観察させた後、数時間してからたくさんの蝶の標本を前にして「さっき見た蝶はどれ？」と尋ねてみます。すると「黄色」や「縞」という言葉をすでに知っている子どもは、すぐに正しく指すことができるのに、それらの言葉を知らない子どもは首を傾げてしまうといえます。

つまり、「この蝶は黄色い」とか「縞があるな」と認識できるのは、それらの特徴を頭の中で言葉に置き換えることができるからであって、同じものを目にしているにもかかわらず、表現する言葉をもたないと、色も模様もはっきりと意識することができないのです。

「知能は幼児期に言葉によってつくられる」これはフランスの言語・心理学者ポール・ショシャルの言葉ですが、先に挙げた例からも、言葉の豊かさ、すなわち語彙というものが子ども、特に脳の発達期にある幼児の知的発育にどれだけ大きな意味をもっているかがわかりただけだと思います。